老松堂のみた日本

樋口 淳*

<目 次>

1.『老松堂日本行録』とその時代
2. 対馬滞在と早田左衛門太郎
3. 博多滞在
4. 瀬戸内を行く
5. 京都滞在
6. 幕府との交渉
7. 義持との会見
8. 再び瀬戸内をいく
9. 博多滞在と帰国
10. まとめ

キーワード：老松堂, 対馬, 博多, 京都

1.『老松堂日本行録』とその時代

『老松堂日本行録』は、外国人の手になる初の日本紀行です。

著者の宋希璟は、1376年公洪道連山県竹安坊筠亭里（現在の忠清南道論山郡連山里）に生まれました。27歳のときに科挙に応じ、別科第三に登台した秀才でした。途中太宗の怒りにふれ、郷里に帰ったこともありましたが、運よく復職し、日本にむかうまえに、少なくとも2度は明に使節として派遣されています。彼の外交的手腕は、たいへん優れたものとして評価され、36歳のおり聖節使書状官としての役目をおえて明から帰ったときには、太宗から褒賞をうけています。

宋希璟の字は正夫、老松堂はその号です。

彼は世宗の命をうけ、1420年の閏正月15日にソウルを出発し、4月21日

＊ 専修大学校 教授(比較民俗學)

に京都に到着、6月16日に将軍足利義持に謁見した後、同月27日に京都をたち、10月25日にソウルに帰着しています。彼の日本行は、もちろん善隣と友好を旨としたものではありましたが、大きな危機をはらんでいました。

1420年は、朝鮮側でいう己亥東征、日本でいう応永の外冦の翌年です。己亥東征というのは、いうまでもなく1419年(応永26年、朝鮮の世宗1年)に、朝鮮国軍が対馬を攻撃した事件です。韓半島の人々は、高麗末の14世紀半ば以降、とくに倭冦に苦しんできました。

倭冦は、1350年2月には慶尚道の固城、竹林、巨済を襲いました。『高麗史』がこれを「倭冦の侵、此に始まる」と記したため、その年の干支をとって「庚寅以來之倭賊」ともいわれます。

日本の優れた倭冦研究者である田中健夫氏によれば、宋希璟時代の朝鮮では倭冦が半島各地を荒らして大きな被害をあたえるために、その対策として対馬島主宗貞茂に特権をあたえて、日本から朝鮮に渡航するものを統制させ、倭冦の鎮静に大きな成果をあげていました。ところが、1418年に対馬で貞茂が死に、対馬島内の実権は海賊の首領の早田氏にうつってしまいます。さらにわるいことに、倭冦の1船団が朝鮮の沿岸を襲う事件がおこりました。朝鮮の太宗は、すでに世宗に位を譲っていましたが、倭冦の根拠地とかんがえていた対馬島に攻撃を加えることを決意します。

そして1419年6月、兵船227隻、軍兵1万7285人からなる大軍が65日分の食糧を携帯して、巨済島を発し、対馬島に殺到します。朝鮮軍は対馬の浅茅湾に入って尾崎に泊し、ついで船越に柵をおき、仁位に上陸しますが、対馬軍の迎撃にあって敗退しました。

対馬領主宗貞盛は、朝鮮軍に対して暴風期が近づいていることを警告し、あわせて停戦修好をもとめ、朝鮮軍はこの要求をいれて撤退しました。

この己亥東征をめぐって日本側の情報は錯綜します。この事件直後の京都では、「六月廿日、蒙古高麗一同に引き合て、軍勢五百余艘対馬島に押寄せ、彼の島を討取る」(『看聞日記』応永26年8月13日条)などというように、対馬を攻撃したのが明と朝鮮の連合軍であるかのように推測し、不安をいだきます。その背景にかつての「元寇」の記憶があったことは言うまでもありません。

九州探題であった渋川義俊は、博多の豪商宗金を京都につかわし、幕府の意向をうかがわせます。宗金は、帰化中国人の子で当時将軍の側近として外交使節の接待役をつとめていた陳外郎を介して、将軍義持に事情を説明させました。

これを受けた幕府は、朝鮮側の真意をさぐるために、「大蔵経を求める」という名目で博多妙樂寺の僧無涯亮倪を正使、陳外郎の子で博多商人の平方吉久を副使として朝鮮に遣わしたのです。当時の日本外交の舞台で、帰化人、貿易商、禅僧などが大きな役割を果たしているのがよくわかります。

しかし、今回の出來事の対応に苦しんだのは、幕府や九州探題ばかりではありません。とくに強く、朝鮮との国交を修復したいと考えたのは、対馬の人々です。彼らは、なんとか国交断絶を回避しようとして「時応界都」あるいは「辛戒道」という人物に宗都都熊丸(宗定盛)の使者を名乗らせて、朝鮮に送ります。

時応界都は、「対馬島は土地がやせており、生活がとても困難です」「もし我が島を貴国境内の州郡と同様の1州とし、都都熊丸に印章を賜れば、貴国に臣としての節義を尽くしましょう」と上言します。これを受けた国王世宗は、対馬を慶尚道の所属とし、宗氏都都熊丸という印章を対馬に送ります。この時の対馬人の対応は、日本と朝鮮の間にあって、なんとか生きのびようとする生活者の姿勢をよく示していると思います。彼らは、倭寇として朝鮮を侵略しながら、同時に交易者として利を

占め、日本に属しながらも、朝鮮から攻撃をうけて断交の危機に瀕すると、日本を捨てて朝鮮に帰属を求めるという、「柔軟」といば柔軟、「無節操」といえば無節操な、成り行き次第の態度をとります。彼らにとって大切なのは、目の前の生活であって、国境などはどうでもよいのです。

宋希璟が、都をたったのは、このように様々の思惑と情報の錯綜する「危機をはらんだ時代」でした。彼が世宗からうけた使命は、世宗の書簡を義持にとどけ、とりあえず日本からの使者の要請に答えて大蔵経を贈り、両国の交隣関係を確認し、あわせて倭寇によって連れ去られた朝鮮人の送還を依頼するというものでした。

希璟の旅は、このような危機のもかかわらずゆったりとしたもので、1月15日に都をたちながら、途中、家族や友人と別れを惜しみ、ようやく釜山を出発するのが、なんと2月15日です。この使節の構成は細部まで明確ではありませんが、たいそう立派なものでありました。日本からの使節である無涯亮倪も、同道したようにも見られます。また途中の善山では、九州探題の使わした使節とも交流していますから、今回の事件に対する日本側の懸念や理解の程度についても、少しずつ情報を得ていたのではないかと思われます。

2. 対馬滞在と早田左衛門太郎

宋希璟は、2月17日に対馬につきます。釜山をたち、良風をまって朝の9時に船出すれば、夕方の5時には対馬についてしまうのです。陸の道の遠さにくらべて、海の道のなんと近いことでしょう。

対馬で宋希璟を待っていたのは、早田左衛門太郎でした。対馬の支配者である都都熊丸（宗貞盛）は九州に居住して、不在だったのです。

早田左衛門太郎は、朝鮮王朝から「万戸」という数千の兵士を束ねるは

ずの官職を与えられた「受職倭人」でありながら、同時に倭寇の頭目で、対馬の対朝鮮貿易の主導権をにぎり、とくに宗貞茂死後の1418年以降は大きな影響力をもつにいたりました。希璟自身も「今事勢を観るに、馬島は凡そ事皆此の人より出づるに似たり」と述解しているほどなのです。

ですから己亥東征のきっかけとなった倭寇の侵攻も、己亥東征の経緯も、時応界都の朝鮮派遣も、すべて彼のよく知るところであるばかりか、すべてが彼の差し金であった可能性すらあるのです。

その折しも、朝鮮に使いした時応界都の一行が対馬に世宗の書をもって帰島します。すると早田は、こう言うのです。

「朝鮮は、昨年この島に行兵して、いままたこの島を慶尚道に帰属させようとする。対馬は守護である少弐氏代々の受け継ぐ島で、もしこの事を少弐殿が聞けば、命をかけて戦おうとするだろう。どうしたらよいだろう？この書を少弐殿に送るか、ここに留めて知らせずにおくか、あなたに判断していただきたい」これは、明らかに希璟によって代表される朝鮮の反応を読んでいるのです。

希璟はこのように複雑な対馬事情は初めて耳にするものであったに違いないのですが、きわめて敏速に対応します。

「対馬は、たとえ朝鮮に帰属させても、朝鮮の人々を住まわせるところではない。また、対馬の人々を朝鮮に帰属させても、用いる所がない。上（世宗）が対馬を慶尚道に属させたのは、対馬の人々の願いを聞かないのは仁ではないと判断したからである。今日のよう聞くような情勢を知れば、べつに対馬を帰属させようとはされないだろう。私も、そのように上前に申し上げよう」と答えたのです。

これを受けて、早田左衛門太郎は世宗の書簡を少弐殿には知らせず、対馬にとどめて握りつぶすことにします。

時応界都を、いったい誰が、なんの目的で朝鮮に派遣したかは、今となっては不明です。

しかし、いったん使者の持ち帰った国王の手紙と「宗氏都都熊丸」という印章を再び朝鮮に送り返すのは、大変な無礼といえるでしょう。

希璟は、大きな危険を冒します。ここでもし少弐氏と対立してしまえば、将軍義持に世宗の書契をとどけるという使命が果たせません。当時、朝鮮は、同じ倭国といっても、対馬と九州と本州（本国）を3つの異なった領域と考えて外交的な判断をしていた節があります。希璟の使命はあくまで本国の支配者である国王義持に書契をもたらすことです。大事の前の小事ということでしょうか。

この大胆な判断によって最初の危機をきりぬけ、宗希璟は博多にむかいます。

3. 博多滞在

まず志賀島に停泊すると、先に博多入りした亮倪が、代官の伊東殿と平方吉久殿とともに酒をもってやってきます。

3月4日、博多に入った一行は大歓迎を受けます。希璟は、身分を示す玉の飾りと冠をつけ、法螺貝を吹く螺匠4名をはじめ供の者を率いて徐に行きます。日本側の警備兵が左右を守り、しずしずと進む異国の行列は、当時の博多の人々にとっては大変めずらしいものであったに違いありません。老若男女から僧尼にいたるまで、路をうずめてこれを観たといいます。

江戸時代になると朝鮮通信使の來訪は、多くの資料を残し、その歓迎振りは見事な絵画ともなって残されていますが、希璟の一行もまたそれに劣らぬ威容を示し、大歓迎を受けたことでしょう。

博多での希璟は、僧を中心に多くの文人と交わり詩文を交わしています。しかし、とくに対外貿易や外交に携わっていた宗金や陳外郎の息子

である平方吉久とは、頻繁に会い、情報を交換したものと推測されます。

当時の博多は国際として、中国の人々も少なからず居住し、賑わっていたに違いありません。少し時代は下りますが、16世紀半ばの記録では、博多州の東門外に100名以上の唐人が住み着き、妻子とともに家を構えている。日本の女を妻にしている者もいるという有様でした。少なからぬ異国人が渡來し、倭人とともに貿易に携わり、国籍や民族を超えて、東アジアの海を行き來していたのだと思います。

異国人とともに、国際的な経験と知識をもって、外交と貿易に活躍したのは僧侶です。なかでも宗金は、僧籍の商人として知られています。彼は、この数年後に図書倭人の地位をえて、朝鮮貿易に力を発揮し、早田左衛門太郎等とともに、銅2800斤を輸出し、綿紬2800匹を博多に持ち帰ったといわれます。彼は、管領斯波氏の朝鮮貿易をも請け負い、1447年には総勢50人を率いて朝鮮に渡ったそうです。こうした彼の活躍は、希璟一行との深い交わりから生まれた信頼関係を基にしたものであったのではないでしょうか。

宗金の一家はその後も、朝鮮や明との貿易にたずさわり、息子の性春、孫の茂信も、博多を代表する商人として活躍したという記録が残されています。

宋希璟は、博多に滞在すること20日あまり、義持からの上京の許しをえて、3月24日には志賀島を発し、いよいよ京都に向かいます。

4. 瀬戸内を行く

船は、赤間関を経て瀬戸内海に入るのですが、一行が京都に到着したのが4月21日ですから、なんと一月ちかい船の旅をしたことになります。今日の穏やかな瀬戸内海からは想像もできないような悪天候や強風にも

翻弄されます。

しかし当時の瀬戸内海には、雨や嵐よりも恐ろしい海賊が跋扈していたのです。国王・義持は、多くの護送船をおくって希璟一行の警護を固めたようですが、不安はさりません。

赤間関を発するとすぐに海賊の偵察船らしい小船がやってきます。源平の合戦で有名な壇ノ浦に停泊しますが、夜中には、怪しい声がして眠れません。朝になって、その正体をしると、ただの雉の声だったのですが、未知の賊地をゆく者の気持ちは察するに余りあります。

景勝の地室積をすぎ、遠くに村の火をみたときも「海辺にすむ人たちは皆海賊である。だから村の火をみても心は安らかではない」と書いています。

当時の海賊たちは、もちろん足利幕府のゆるやかな支配の網のなかで生きていたわけですから、朝鮮の使節を襲うことはまずないはずです。しかし1395年の回礼使梁漢城需は、安芸国高崎（現在の広島県竹原市）あたりで海賊に会い、携えてきた贈り物や食糧、衣服にいたるまで一切を奪われたというから、油断はなりません。たとえ護衛の船がついていても、当時の航海技術では船団がばらばらになり、希璟一行の船が孤立することもあったのです。

その危険水域を過ぎるとき、1艘の小船が矢のように近づいてきます。一行は鼓をうち、旗をふり、角笛をふき、錚をならして、精一杯応戦します。甲をかぶり、弓を手にして船上にたちます。海賊の船にも、人が麻のように立ち並んだといいます。

この時は、幸い亮倪と宗金の船2艘が、すぐに駆けつけ、事なきをえました。

その後は、大きな騒動もなく、尾道、日比、牛窓、室津などをすぎ、各地の寺を訪れながら、4月16日に兵庫の港に入りました。

5. 京都滞在

4月21日、京都に入った宋希璟は、魏通事天の家に宿泊します。この魏通事天は、実に数奇な運命をたどった人でした。

彼は、1350年頃(元末)の生まれの中国人ですが、子供の頃、おそらく倭寇のために囚われて日本にやってきました。しかし、なにかの事情で朝鮮にわたり高麗末の人李崇仁、字は子安、号は陶隠の奴となります。李子安は、中国にも聞こえた優れた文人で、『陶隠集』という文集があります。この人に仕えた後、才能を見込まれたのでしょう。回礼使に従って日本にむかいます。そこでまた、たまたま中国からの使節に見出され、中国人であるということで、中国に連れていかれます。

時代は、すでに明となっていましたが、帝の洪武帝に謁見し、帝の命令によって再び日本に送還されて、室町幕府の通事として活躍することとなります。

時の将軍義満は、永樂帝に親書をおくり、対明貿易の道をひらくことに大いに心をくだいた人でしたから、魏天のような人は、水を得た魚のように大活躍をしたに違いありません。

日本人の妻をめとり、娘をふたりまで儲けたそうです。

時は移り、対明政策に消極的な義持の天下となりましたが、なお困難な外交交渉がつづいたに違いありません。魏天もすでに70歳をすぎました。

彼は、宋希璟の一行が宿舎の冬至寺についたと知ると酒を持って迎えにでかけ、自宅に招待したのです。魏天は、若いころ見につけた朝鮮の言葉をわすれず、希璟と旧い友達のように自由に話し、昔を懐かしがったそうです。

その日、訪れたもう一人の人陳外郎も、やはり不思議な運命をたどった人です。彼は、すでに登場した博多商人平方吉久の父ですが、彼の父

陳延祐は帰化中国人でした。元朝が滅びた時、礼部員外郎であった延祐は、日本に亡命し、博多に住んだようです。延祐は、多才な人で特に薬学にくわしかったので、足利義満に再三上洛をもとめられたのですが、ついに応じることはなかったようです。

しかし延祐の子宗希は、父に代わって上洛し、父の中国での官職名「外郎」を名乗り、医学・薬学の専門家として、室町幕府に重く持ち抱えられました。陳外郎は、さらに遣明使に同行して、中国の薬学を学び、秘薬霊宝丹を持ち帰ったとされます。その後の外郎家は代々医を業とし、さまざまの薬を生み出し。毎年1月7日、12月27日には将軍に謁し、薬を献上することを慣わしとしました。

希璟の訪れたころの初代外郎は、すでに五十をすぎていたかもしれませんが、魏天とともに、中国通として、足利幕府の外交の上でも大きな役割を果たしていました。

外郎が父延祐の医業を、平方吉久が祖父の博多商人としての貿易業を受け継ぎ、京・博多という当時の政治・経済の中心にあって、父子連携して、日本の外交を担っていたのでしょう。

この頃の希璟は、日本の制度や人々の生活に、好奇の視線をむけ、観察に余念がありません。

海が日本と中華世界を隔てる力は、想像以上であったらしいのです。衣服も違うし、言葉も違う。法や制度も違う。日本では、将軍をはじめ管領も大名たちが、大きな土地を分け合って領有し、各地に代官を派遣している。領民を支配し、税を私し、子孫に受け継いでいる。これは、中国や朝鮮の土地や税制と大いに異なります。

魏天や陳外郎のような富裕な人々が、私財をもって朝鮮の使節をもてなすというのも不思議です。

その上、日本では男女の僧の数が多く、良民の半数くらいが僧籍に入ってしまうようです。

このように僧が多くて、どうして国を維持していくのでしょう。寺ばかりがやたらに多くて、読経の響きだけが聞こえてきます。中央集権の整然とした儒教の国からきた旅人には、理解を絶することばかりです。

希璟の訪れた季節は麦秋で、大小の麦が野に満ちて、黄色く熟していました。

これは後に知ることですが、当時の近畿地方の農家は、秋に稲刈りの終わった水田を耕して大小麦をまき、明年の初夏に大小麦を刈ると、すぐに稲の田植えをして、秋の初めに稲を刈り、また秋の初めに木麦(蕎麦)を播いて、それを冬の初めに刈り取って、大小麦をまくというサイクルの農耕を行っていました。つまり、大小麦→稲→木麦(蕎麦)三毛作です。これまで見聞した対馬や北九州の痩せた海岸地帯とはまったく違った風景です。目の前に、技術的にも優れた、豊な農業地帯が広がっていたのです。

こうした希璟の観察は、日本人の生活史を知る上でも大変貴重な史料です。室町時代の近畿地方の農民の生活は、現在想像するよりも、はるかに豊で、創意工夫に満ちていたように思われます。対馬や瀬戸内の海民たちの生活とあわせて、この記述を目にすると、当時の人々が農民ばかりで、おまけに米だけを作って、米の年貢を納めるのに汲々としていたというステレオタイプの理解をこえる手がかりが見えてきそうです。

6. 幕府との交渉

さて、やっと京都に着いたのに、3日目の4月23日になっても、あいかわらず幕府の対応はかわりません。陳外郎が伝える義持の命令では「朝鮮から携えてきた大蔵経と土産の品は等持寺(＝冬至寺)に残し、希璟自身は宿舎の深修庵に移れ」というばかりです。この無礼な態度に対して

、希璟は不満をぶちまけます。「自分は朝鮮国王の書簡を奉じて京を訪れたのに、いまだ日本国王・義持に面会して、書簡を奉ることもできない。これは礼儀に反するので、自分は深修庵には行かない」と抗議します。

すると陳外郎が、輿と馬をつれてやってきて、自分と一緒にとにかく深修庵に移れといいます。

宿舎の深修庵につくと、外郎のほかに魏天も加わり、はじめて京の現状を伝えます。

「一昨年、明の皇帝の使者の呂淵が兵庫にやってきて、皇帝の言葉を伝えた。それによれば『義持の父義満も、朝鮮国王も皆自分に仕えたのに、義持だけが従わない。自分は朝鮮とともに兵を送るから、お前は城を築き、堀をほって備えを固めて待て』という。怒った義持は、呂淵に京での謁見を許さず、海賊を遣わして呂淵を打とうとしたのですが、あいにく順風で海賊が呂淵に追いつけぬまま、呂淵の帰国をゆるすことになった」というのです。

朝鮮側でいう己亥東征、日本でいう応永の外寇が勃発したのは、その翌年の6月のことですから、最悪のタイミングであったわけです。京都の義持をはじめ、多くの人々が、これを元寇の再來と受取ったのも、当然のことでした。

そしてさらに悪いことには、九州を固める少弐満貞が「中国の兵船1000艘、朝鮮の兵船300艘が日本を攻めてきたが、自分は勇敢に戦ってこれを退けた」という報告を送ったのです。義持は、これを聞いて少弐満貞には多くの褒賞を送り、同時に朝鮮に対しては大いに怒ったというのです。

もちろん朝鮮に対する日本側の対応はより複雑なもので、己亥東征に関する情報収集のために亮倪を筆頭とする使者を送ったことは冒頭に述べたとおりです。しかし、義持が朝鮮に対して少なからぬ不快感や疑い

を抱いていたことは間違いないでしょう。

陳外郎は、希璟に対して、このような日本側の事情に配慮するように求めたのです。

宋希璟は、これに対して敢然と論争を挑みます。

「対馬に兵をむけたことは説明しましょう。聴きなさい。これまで宗貞茂は、朝鮮国王に対して礼を尽くしてきました。国王はその誠心を知って、米や布をたびたび下され、酒や肉にいたるまで与えられたのです。対馬もこの恩に感じて、20年余りは一家のごとき付き合いをしてきたのです。ところが貞茂がなくなると、昨年の春から、対馬の賊どもが朝鮮の周辺を侵し、人民を殺し拉致し、兵船を盗み取ったのです。国王は、これに激怒して、将軍たちに命じて追討させました。しかし、追討にあたって国王は『ただ賊のみを討て。宗貞盛には手をださず、九州は安堵せよ』と将軍たちに命じたのです。朝鮮の兵が日本本土に侵攻するなどは、もってのほかです。またもし朝鮮国王が本国に対して好ましからざる気持ちを抱いていれば、今日本国王が大蔵経を請うても、下されるはずはないでしょう。土産の品や回礼使を送るはずがないでしょう。このことをもって国王の意図を知るべきです。国王は大臣や六曹を召して『対馬は日本と朝鮮の間にある。いつも密かに攻めてきて盗みを働くし、日本国王の命にも従わない。いま私がこれを打って、日本国王がこれを聞けば、きっと喜ぶにちがいない』と言ったのです。朝鮮が明と心を一つにして、日本国を討とうなどということはありえません。そういうことは、まさに荒唐無稽です。取るにたりません」実に見事な外交ではないでしょうか。己亥東征の本來の意図が、ここまで限定されたものであったか否かは別にして、日本側が望んでいた反論は、まさにこのようなものであったに違いありません。

陳外郎は、さっそく「そのような言葉は聞いたことがない。御所はまったく耳にしていない。さっそく私が報告しましょう」と応じます。

しかし、そこでもう一つ大きな問題が起こります。朝鮮国王のもたらした書簡の年号の問題です。そこには「永樂」という明の年号が用いられていたのです。

朝鮮は、自らを明の朝貢国と位置づけ、明から暦を授かっていましたから「永樂」の年号が国書にあるのは当然です。これが、明との国交を望んだ義満の時代であれば、なんの問題もないのですが、義持は大の明嫌いです。「永樂などという年号の入った書簡を受取るはずはない」と陳外郎は考えて、「永樂」を「竜集」に書き改めるよう迫ります。

朝鮮からの国書を書き改めたり、都合の悪い部分は省いて上奏するのは、日本の外交の常套手段であったようで、後の豊臣秀吉の時代には、大きな不幸をまねく原因の一つになったことは、よく知られています。

宋希璟は、この姑息な書き換えという手段を断固拒否します。「我々は、死をもってしても国王の御書を改竄することはできない」というのです。

まさに士大夫というべきでしょう。

この隘路をとくために恵珙と周頌という二人の禅僧がかけつけます。恵珙はとくにあの絶海中津の後継者です。禅僧が、室町幕府の外交の中枢にいたことは、よく知られています。

危機に当たって、日本側も、まさに総がかりで知恵をしぼったことがよく分かります。

禅僧は問います。

「あなたの來訪の目的は何ですか」

希璟は答えます。

「回礼と通信です。朝鮮国王世宗は即位して、すでに3年たちました。隣好を通じようと望んでも、日本への道は風も強く波も荒い。また海賊も暴挙におよぶので、使いを送りませんでした。いま日本国王の使いが帰国して、我が国王の考えを伝えようとしています。私は、それに同行

して、返礼をし、国王の親書をもちきたりました。そのために來たのです」。

この禅問答は、希璟の勝ちとみえます。

禅僧たちは、世宗の書簡を開くことをもとめ、詳しく検討していいます。

「親書のうちには、朝鮮国王の思いがこもっている。私たちはこれを写して帰って御所に報告しましょう」こうして、最大の危機は去りました。

このときの宋希璟の気概あふれる言辞は、朝鮮王朝につかえた士大夫たちの最良の部分を示しているように思えるのです。

しかし、危機は去っても、事態はなかなか進展しません。

希璟が、ようやく義持に面会を許されるのは、実に6月16日ですから、その間50日あまりの日々を過ごさねばならなかったようです。

希璟は、その間、食欲を失い、湿気と薮蚊になやまされ、顔色は悪くなるし、白髪は増えるし、気の休まることはないと訴えています。おまけに盗賊までやってきて、持參の品々をねらいます。

こうした悪い待遇にも、希璟は声を荒げて、大騒ぎをすることなく、したたかに応じます。

まず、身近の世話をする倭人のなかから聡明そうな者を選んで、食欲不振の理由を説明します。

亮倪が訪れてくると、詩を作り、亮倪を介して義持にわたしてもらいます。

するとようやく、恵珙、周頌の二人が、義持の疑いが晴れたと告げにきます。義持は、亮倪を通じて希璟の病の伺い、食事を用意させます。

希璟は、そこで駄目押しとでもいうような妙手を思いつきます。義持が、先の将軍義満の13回忌の喪に服しているのにならって、自らも殺生を絶ち、魚を食べるのを止めるのです。

これは、かなり効果があったようです。3日後に亮倪がやってきて、希璟が魚を絶ったことを聞き義持が歓喜し、嬉々としていると告げました。

朝鮮からの回礼使を50日も待たせるなどということは、現代の私たちからしてみれば、およそ考えられないことですが、日本側にも多少の事情はあったのでしょう。

義持が希璟の使命について十分理解した後は、待遇も目に見えてかわり、警護も、身の回りの世話もしっかりとしたものに改善されました。食事も、一日4回供されたといいます。

その費用は1日につき23貫といいますから、応接する側にとっても相当の出費であったと思われます。

7. 義持との会見

6月16日、いよいよ義持との会見の日です。場所は宝幢寺。春屋妙葩を開山とする名刹です。その日の宋希璟のいでたちは、弓と刀を携えた倭人5名を先導に、螺匠とよばれ法螺貝を吹く者4名を左右に従え、輿を担ぐ者2名、冠をつけた倭人2名が希璟の馬をひきます。希璟自身は、「大紅衣」という礼服をつけ、「頂玉玉纓」という玉の冠飾りと飾り紐をつけて、ゆっくりと進みます。従事官、通事など10名の余の一行が馬で続きます。その後を、やはり弓と刀をもった倭人6人が警護します。

博多での行列と形式は同じですが、なお一層華やかなものであったに違いありません。

しかし義持との会見は、きわめて形式的なものであったようです。義持が使節にあい、朝鮮王の書簡を受取るということ自体が、既に朝日両国の友好の保証となるわけですから、それでよいのでしょう。義持は書簡を受取ったのちに、「これからは、あちこちの寺を遊覧するように」と

いう勞いの言葉を伝えました。

希璟は、それから6月25日まで、10日ほど義持の返書を待たねばなりません。やはり、今日では考えられぬほど悠長なペースです。その間、希璟は将軍の言葉通り、西方寺や仁和寺を初めとする京の名刹を訪れ、僧侶たちと詩文を交わし、友好をふかめます。

この長期滞在で、宋希璟はもう一つの貴重な報告を残しています。それは、当時の性風俗に関する見聞です。

たとえば、希璟が会見をまつ6月13日に、義持は斯波氏の家臣甲斐某の家を訪れます。甲斐某は、当時希璟一行の警護を担当し、食事を供していた責任者ですから、義持からみると希璟をもっともよく知る人であったろうと思われます。

甲斐某は貴人を迎え入れるために別堂をもうけ、弓、剣、鞍、銭物などの贈り物を並べ立て、山海の珍味を用意します。そして義持が訪れると、甲斐某は夫人とともに庭で待ち、主人は堂外で義持の伴をして訪れた賓客の接待をします。主婦は、堂に上り将軍の接待をします。

義持が酔って風呂に入ると、主婦もそれに従い、世話をするというのです。ときにその妻と通じて子供が生まれると、妻を妃として宮にあげるともいいます。

これは、民俗学でいう「異人・貴種歓待」の興味深い記録ですが、希璟の目には「もっとも希しきこと」として映ったようです。

希璟がまた、時に町に出れば、女の数が多いことにも驚かされます。男の数の倍もいるでしょうか。その女たちは路を行く男たちを誘い、断っても衣をひっぱって店に連れ込むといいます。そしてお金さえ払えば、昼からでもことに及ぶのだそうです。なんとも、平和といえば平和、いまも変わらぬ日本の風景です。

希璟の見るところ、日本の女たちは、川辺や海辺に住まいしているので、とても美しいそうです。港や水辺に遊女が多かったことは、多く記

錄にありますので、正しい観察なのでしょう。

そのうえ、女たちのみならず、20歳以下の僧侶は、眉毛をそって、墨で眉をかき、顔におしろいをつけて、色物の着物をきて女形をしていると記録します。将軍も、少年を好み、宮中にいれて、妻妾が多くいるにもかかわらず酷愛する、としています。

近世・近代まで、日本に男色の風のあったことは、よく知られていますが、これは現在からみると驚くべき記述です。これが日本の伝統文化であったと知れば、大いに驚く日本人も少なくないことでしょう。

さて、そうこうするうちに出発の時が訪れます。6月25日、亮倪がやってきて、義持の返書ができたといいます。内容は、大蔵経を初めとする贈り物に感謝し、友好関係を確認するというものです。問い合わせの倭寇によって連れ去られた朝鮮の人々に関しては、既に没しており、その子孫たちも帰国の意志がないが、今後も捜索は続けようといいます。現在の北朝鮮の「日本人拉致疑惑」に対する回答に似ていて興味深いところです。大蔵経のお返しには銀の扇子を100柄贈るとあります。

京都での別れに際して、希璟がとくに名残惜しくおもったのは、甲斐氏の家臣であった狩野殿です。彼は、甲斐某のもとにあって終始希璟の警護と身の回りの世話をしてきました。

希璟の言に従えば、まさにその性「醇にして直」、希璟に向かえば「愛にして敬」、ほとんど倭風がなく、朝鮮の謹厚の人と異ならない、と言います。別離に際して、まず狩野殿が泣き、つぎに希璟が泣きます。そのとき、希璟が読んだ詩は、つぎの通りです。

我愛騰(＝狩野殿)監護秉心醇乎醇遇我旅鎖中一見如故人中心与我同結交無旧新数月同杯酒日久弥慇懃今朝忽分袂我心悲以辛朝鮮与日本自昔相交隣況今為一家星槎泛海門去住一家内別離何足論とくに最後の「朝鮮と日本と昔より相交隣す。況や今一家と為り星槎海門に泛ぶ。去るとも一家の内に住む。別離何ぞ論ずるに足らん」というくだりには心を打た

れます。そこには狩野殿をはじめとする日本の友人に対する思いとともに、自らが「朝鮮と日本を一家となした」という誇らしい気持ちが見えます。まさに使命を果たした者の喜びを歌っているのでしょう。

8. 再び瀬戸内をいく

宋希璟は、6月27日の深夜、義持の書簡をまって淀川を下ります。

瀬戸内海をゆっくりと、しかし確実に西にむかって船をすすめますが、7月8日、尾道にいたって「風に阻まれ、賊に阻まれて」、7月22日まで滞在します。この間、天寧寺の住職周冕と役僧の梵道と親しく交わります。尾道には、行きにも4日ほど滞在したので、旧知の仲であったかもしれません。その時、希璟が二僧に贈った詩の序文も紹介しておきたいと思います。

希璟の言葉は、だいたい次の通りです。

「大抵の僧侶には２つの問題がある。一つは行いを偽って人を惑わすことであり、もう一つはその言葉を偽って自らを利することである。このことは中華世界にも見られる。しかしたとえ中華世界ではなく、外国であっても、その言動に誤りがなく、道に近ければ、ともに語り合うに足りる。日本の仏教は、町でも村でも信奉されており、あちこちに寺があり、僧侶の数が一般人の倍もいる。いま旅の途上で語り合うと、その優しい言葉は、実に行き届いている。言葉は違うけれども、その理は私たちと共通する。まして朝鮮と日本は、古くから隣り付き合いをしてきた。今、朝鮮国王の命を受けて、平和と友好の旅をして、二師と出会うと、旧知の友と会うようだ。いま、ともに寺を訪れ、また船上に会って、行き來をして、美しい松や竹、海や山を目にし、香をたいて茶をいれて、詩を交わし、秋を樂しんでいる。とても樂しい。」

一方に、海賊あり、凪がありますが、実に長閑な交流の風景です。異国人であり、儒者でもある希璟が、懐の深い、広い視野をもって禅僧たちと交わっているのが、手に取るようにわかります。

しかし、この瀬戸内紀行のハイライトとなるのは、翌日の蒲刈での体験です。宋金によれば、この蒲刈を境に海賊の縄張りは東西に分かれるのだそうです。そこで、あらかじめ金を払って東の海賊を一人船に乗せておけば、西の海賊にも東の海賊にも襲われることはない。この金は、一種の通行料であり、警護料であったものと思われます。蒲刈のあたりを瀬戸内の東西を分かつ関所とみれば間違いないのかもしれません。

希璟の船には、宋金のはからいで銭7貫文を払い、一人の東賊が乗せてありました。その賊は「私がいるから安心しなさい」といって海賊の家に向かいます。そして交渉が成立すると、しばらくして海賊たちが小舟に乗ってやってきて、希璟の船が見たいというのです。

海賊の首魁は僧形をして、はなはだ奇妙なことに立ち居振舞いも言葉も朝鮮の人と同じで、希璟と楽しげに言葉を交わします。希璟の鞍を見たり、船の奥を見物したりしたのち、「家に來て一緒に茶を飲もう」といいます。

希璟は、伴をつれて舟をに移って首魁の家に向かいます。その途中に海賊の手下たちの話を立ち聞きさせると「朝鮮の船には銭や宝がないから、後から來る琉球の船を襲おう」などと内輪の相談をしたいたというのです。

まったく物騒な話ですが、当時の海の民たちの有り様をよく示す記録だと言えるでしょう。

日本の優れた歴史家である網野善彦氏の指摘するとおり、彼らには国境に囲まれた陸の国家とは別に、玄界灘や東シナ海によって結ばれた海の世界があったのだと思います。14世紀半ばから活躍の舞台を広げた「倭寇」と呼ばれる人々には、陸に住む人々とは違った掟とネットワークが

あったように思われます。

彼らは、時には多国籍の集団で、日本語のみならず朝鮮語や中国語をあやつり、民族の枠を越えて行動していたのでしょう。その本拠となったのが、済州島であり対馬であり、北九州であり瀬戸内であったに相違なく、希璟はまさに倭寇の縄張りを旅して歩いていたのです。

希璟がさらに船を進めると、赤間関で「三甫羅(サブロウ)」という日本名をもった朝鮮人に出会います。当時の瀬戸内には朝鮮語を解する日本人や、日本の名前をもつ朝鮮人が、ごく普通に暮らしていたのでしょう。

9. 博多滞在と帰国

宋希璟の一行は、あいかわらず海賊と悪天候に悩まされながら、7月30日に志賀島にたどりつきます。その後博多に移り、8月20日まで滞在し、対馬を経て9月30日に出発点の薺浦に帰還します。途中、博多ではもう一度少弐満貞を説得しないわけにはいきませんでした。満貞は、いまだに己亥東征の折の朝鮮側の意図を疑い、壱岐の島あたりの兵船をあつめて朝鮮に対し報復を図りたいというのです。ここでも、希璟は熱辯を振るうことになりました。結局、希璟は満貞に会うことはできませんでしたが、陳外郎の息子の平方吉久等を通じて間接的に説得することに成功します。

こうして使命を果たした希璟が、世宗に拝謁するのは10月25日、太宗には10月26日です。昨年の正月15日に漢陽を立っていらい実に1年と10ヶ月余りの旅であったわけです。その出発に際して、世宗に「他国へ帰くに、詩は以って作らざるべからず」と教えられ、「出城の日より復命の時に至るまで、浅陋を揆らず、凡そ耳目に接するものあらば、皆記してこれを詩とすると云う耳」という気概で綴ったのが、この「老松堂日本行錄」です。

10. まとめ

本稿は、研究論文というより、宋希璟の人柄にひかれた私の読書ノートのようなものです。

「老松堂日本行録」には、参考文献に記したように村上章介先生の見事な校注と解説つきの「日本語読み下し版」が存在します。さらにこの版には原文も付いていますから、韓国の読者にはむしろその方が理解し易いかもしれません。ただ、私がここに敢えて紙面を戴いたのは、私という現代の読書人が宋希璟という中世の朝鮮士大夫の生き方に強い感動を受け、その一文に出会ったことの喜びを韓国の友人たちに伝えたかったからにほかありません。

宋希璟の外交官としての資質と行動力は、今日の国際情勢に照らしても、実に見事なものであったと思われます。

希璟の活躍した時代の朝鮮と日本は、倭冦に翻弄され、まさに危機のただなかにあったといってよいでしょう。希璟は、その危機の渦中に真っ直ぐに漕ぎ出していきます。

そして彼が、まず苦しんだのは、朝日両国の間に横たわる情報のギャップです。対馬が、朝鮮への帰属を望んでいるとばかり考えてやってきた希璟は、この問題をめぐる早田左衛門太郎、宗貞盛、少弐満貞、渋川満頼等の思惑の違いに驚かされます。京都に行けば、己亥東征の意図をめぐって錯綜した情報を修正しなければなりません。

しかし考えて見ると、韓日両国間の情報のギャップや、同一事件に対する理解の違いは現在も同じように存在します。事実は一つであっても、その伝わる速度にはズレがあり、受け取る側の利害関係は錯綜しています。メディアも勝手な噂を伝えます。その情報の縺れを解いて、二つの国の間に「正しい理解」と「程よい妥協」を生み出すのが外交というものでしょう。

そこで何よりも必要とされるのは、論争する力と素早い行動力であると思われます。私は、そこに朝鮮王朝の文官の力量というものを見ます。振り返って現在の韓日関係を見ると、このような優れた論者が、韓国にも日本にもいないという気がするのです。あるいはまた、死を賭して隣国に向かい自国の理を説き、譲るべきを譲って外交の成果をあげても、それを正しく評価する者がいない、という今日的状況もあるかもしれません。韓日ともに小人の跋扈する、士大夫には生き難い世の中なのかもしれません。

幸い希璟の場合には、太宗と世宗という良き理解者がいました。対馬の帰属問題など大問題を独断で捌いても、とがめは受けることはなかったのです。

まさに「一介の書生にして、行兵の翌年疑危の際に当り、三寸の舌を持して不測の険を踏み、倭王の難辯の惑いを解き、二殿(少弐殿)の報復の計を沮みて、還りて上に聞す」であったわけです。

外交官としての宋希璟は、このように実に果敢ですが、同時に極めて冷静です。

彼は、終始一貫して日本を「倭」と読んでいますが、当時の日本が大きく「対馬」「九州」「本土」の三つの「倭」に分かれ、それぞれ違ったルールによって支配されていることをよく理解していました。ですから対馬にあれば「対馬の法」を説き、九州にあれば「九州の法」を説く術を十分に心得ています。とくに京都にあっては、将軍をめぐる人間関係をよく理解し、慎重に、しかも巧妙に事をすすめて行きます。さすがに、遣明使節として何度も修羅場を踏んだ外交官です。

ただ、彼の老練な外交の手腕は、けっして上辺だけの姑息なものに終らぬところも立派です。将軍の服喪を知って魚を断ったりしたことも、実に彼の誠意から生まれた行動であったように思われます。

こうした彼の性格は、日本人との交際の場においても遺憾なく発揮さ

れ、その結果、曇りない日本文化理解を生み出したと言えるのではないでしょうか。

希璟の倭人に接する態度には、最初から「小中華を背負って夷を蔑む」ような視点がまったくありません。その点が、後年の江戸時代の通信使たちの態度と大いに異なる点です。

もちろん、当時の日本の性風俗や粗暴な海賊には、大いに驚いたり、悩まされたりするのですが、軽蔑の視線がないのです。禅僧たちとも、詩を詠み、茶を酌み交わして、とても楽しく付き合っています。儒者の立場から、仏教をこきおろすようなことはなく、言葉や世界観の違いを超えて、共通の理を求め、共通の理解に達することに深い喜びを感じているようなのです。

こうした希璟の異文化に対する強い好奇心と客観的な態度には、敬意を感じます。まさに範とすべき人士に出会った思いです。

宋希璟は、深く交わった「倭人」たちとの別れに際して、本気で名残を惜しみ、涙しました。幾度も船酔いに苦しみ、体をこわし、賊に命をおびやかされながら、ついに命をかけて使命を果たす。まさに朝鮮王朝の士大夫の力量を見る思いです。情に厚く、人を信じ、時には海賊の首魁のもとにも臆せず踏み込んでゆく。そんな優れた外交官が、15世紀の初頭に存在したことに、大きな驚きと喜びを感じた次第です。

【参考文獻】

宋希璟著・村井章介校注『老松堂日本行錄』1987年 岩波書店刊
佐々木銀弥著『日本の歴史・室町時代』1975年 小学館刊
村井章介著『中世倭人伝』1993年 岩波書店刊
李進熙・姜在彦著『日朝交流史』1995年 有斐閣刊
上田正昭編『朝鮮通信使』1995年 明石書店刊
網野善彦著『海民と日本社会』1998年 新人物往來社刊
沖浦和光著『瀬戸内の民俗誌』1998年 岩波書店刊

（以上の文献の引用にあたっては、本稿の性格上、あらためて引用注をつけることをしなかった。）

접 수 일 : 2002. 7. 25.
심사개시 : 2002. 7. 30.
심사완료 : 2002. 8. 31.
게재결정 : 2002. 9. 15.

抄錄

老松堂이 본 일본

樋口淳

『老松堂日本行綠』은 외국인에 의해 쓰여진 최초의 일본기행문이다. 저자 宋希璟은 조선국 世宗의 명을 받아 1420년 한양을 출발, 교토를 경유해 같은 해 6월에 일본의 將軍을 에도에서 만나고 10월에 귀국했다. 이 기행문에서 송희경은 朝日 양국 간에 여러 방면에서 정보의 낙차가 있음을 절감하고 양국의 선린과 우호를 염려하는 의미에서 이 기행문을 작성한 것으로 보인다.

예를 들면 쓰시마섬에 관해서는 그들이 조선에의 歸屬을 바라고 있었던 것으로 생각해 왔었으나 반드시 그렇지도 않았음을 확인하고 그간 조선에 전혀졌던 왜국에 관한 정보에 많은 오류가 있었음을 확인한다. 그 밖에도 일본의 여러 사항에 관해 새롭게 인식하고 중국을 中華로 보고 조선을 스스로 小中華로 자처하는 전통적인 조선의 동아시아관과는 다른 視點을 지니고 있음을 이 기행문을 통해서 확인할 수 있다.

본 고찰에서는 이러한 송희경의 기행문을 중심으로 15세기 초기 조선 지식인의 일본인식에 관해 다루어 보았다.